

ウォルフォード報告後の質疑

司会 (大田直子) : まず、ウォルフォード先生に簡単に自己紹介をしていただきます。

Geoffrey Walford : 物理学で学位をとり、二つめの学位は社会学でとりました。バーミンガムの教育学部に最初に就職して、その後ビジネススクールにうつって、そこで教育学の研究に従事しました。ビジネススクールというのは社会学者にとってはとてもよい研究環境でした。8年前にオックスフォード大学に移って、私立学校の研究に携わり、民営化について研究してきました。また調査研究法とか、エスノグラフィーについていくつかの著書を著しています。

司会 : では、どなたからでも、ご質問をどうぞ。

中島千恵 : 龍谷大学の中島です。興味深いお話をありがとうございました。親の教育ニーズと社会における、いわゆる社会的連帯のニーズを、どのようにバランスをとるかということについての問題を考えると、結局、政府がどのくらい、そして、どのように介入してくるかという問題ではないかと思う。イギリスにおいて、アカデミックサークルの中で、それについて主流をいく考えはどういうものか。

GW : とても興味ふかいご質問ですが、お答えするのはとても難しい質問です。親の教育権を重視する派、社会の連帯を重視する派、二つのサイドが非常に別れていて、それぞれのサークルの中で、それぞれの主張をする。どれが主流かということとは言えない。中嶋先生のためにみつけましょう。

佐々木毅 : 国立教育政策研究所の佐々木です。2頁の3段落目のところで、50年代から60年代にかけて、移民を奨励したという話があります。その場合に、非熟練の職の労働力の不足のために移民を奨励したということなんですが、今のイギリスのいろいろな職業教育政策をみていると、アンスキルジョブの時代ではない、もっとスキルを身につけなくてはいけないと強調されているので、このあたりのことは、どのようにマイノリティに関連してくるのか。

GW : 非熟練の職を受けれたのは1950年代60年代というのかなり前のことになるわ

けですが、今のマイノリティというのは第二世代、第三世代ということで、非常に流暢な英語を話している。少なくともマイノリティ教育で求められているのは就労へのアクセスということです。

佐々木：そのことと関連して、就職の機会が限られているので、かえって教育に熱心になるというような場合とか、向上心が出ているという場合があるのかどうか、あるいはエスニックグループの中でのこうしたアスピレーションの違いといったものがあるのかどうか。

GW：おっしゃるとおり、エスニックグループの間に差異があります。子供についても、親についても多様性があります。学業達成については、アフロカリビアンの子供が一番低くて、インド大陸系の女の子の成績が一番いいということが出来ます。親については一概にいうことは難しいものがあります。

佐々木：感想になりますが、昨年の8月にイングランド北部で人種的な対立事件があったということを知りました。考え方がふたつあって、対立があるからセパレートすべきだということと、両者を一緒に教育しなかったからこそ対立が起きたのだという考え方です。ウォルフォードさんのお考えは後者だと思いますが、如何でしょうか。

GW：たしかに昨年はいくつもの事件がありました。9月のブラッドフォードの暴動というのは興味深いものです。そこには公費による宗教別学校が、イスラム教の学校があった。詳細について検討する必要があり、複雑な問題であると考えています。

佐久間孝正：立教大学の佐久間です。明日はウォルフォード先生と一緒に組みで午後の部会をやりますので、どうぞよろしく願いいたします。三つほど教えてください。今日の話は大変参考になりました。一つは前半の方で、ウォルフォード先生はイギリスのイスラムスクールとオランダの同じような条件下にある学校との比較から、こういうふうな問題提起を考えられたということなんですけれども、イギリスで公立系のイスラム学校が認められる前にオランダでは多分、20年くらい前に20数校イスラムスクールが認められていたと思います。ウォルフォード先生が実際にイギリスのイスラム系の学校あるいは様々な宗派学校の公立系とそれからオランダの宗派系学校の公立系を調査なさって、オランダの受入れ政策の特徴とイギリスの特徴とで、どういうふうな点が一番際立った差異であると思われたか、教えてください。フランスは同化主義の国で、中央集権的であり、かなりイギリスとは違うと思う。しかし、ヨーロッパ、EU加盟国の中で比較的他の文化が進んでいるのがオランダではないかと思えます。イギリスも進んでいる方だが、オランダとイギリスの違いをどのあたりに注目されたのか、教えてください。

と思います。第二点は市民性 (citizenship) 教育が今年の7月か8月に法制化されて、9月から義務教育化されていると思うが、このシティズンシップ教育がイギリスで大々的に広められるきっかけになったのはEU化のインパクト、イギリス側よりも、むしろEUサイドのインパクトについてなにかウォルフォード先生がお感じになられている点がありましたら、教えてください。というのは、かなりEUが人種差別とか、シティズンシップ教育について、EUがイギリスよりも先行してところがあるのではないかと考えています。今日の午前中の議論は多少、イギリスの国内での重要な変化を追いかけるという形で議論が展開されたが、今度は国外との関連で、EUサイドからどういうインパクトがあって、シティズンシップ教育がいよいよもってナショナルカリキュラム扱いになってきているのかという側面について教えていただければと思います。三番目は明日の話と重なってくると思いますが、ウォルフォード先生のペーパーで一箇所意見を異にするところがあります。それは、マイノリティについて、例えばイスラムの人を取り上げてみても、親が分離教育を望むものがほとんどいないのではないというそういう論述がありましたが、今なお、分離教育を強く望んでいる、とくに女子教育、イスラムにとっての女子教育において分離教育を強く望んでいるグループの人が一杯いるのではないかと考えているのですが、今なお、女子は区別して教育した方がいいと考えている、とくにパキスタン、バングラデッシュ系の強い親、90%くらいの親の要望があるのではないかという感触をもっているのですが、これは私が本音が聞き出せないからなのでしょうか。

GW：オランダではすでに1917年に法律ができていて、誰でもが公立学校をつくる可能性が開かれていた。モンテッソーリ派とかいろいろな学校ができたようですが、移民に対しては地方が責任をとっているということで、地方が反動的に扱ったということで、最初に移民による公立学校ができるのには10年かかった。イギリスとオランダとでなにが一番違うかということ、オランダの場合は学校に対する補助金について差別的な扱いをしている。例えば親が大学を出ていないとか、親が移民であるという場合にはイクストラとして特別な補助金が出ている。そのために白人と特別に扱われている人たちとの補助金の比率は1：1.9、つまり約2倍でている。これがイギリスの場合との大きな違いである。イギリスの場合にはまだ私立学校がほとんどなので、貧しい教育条件、施設条件ということになっている。これが一番大きな違いではないでしょうか。

シティズンシップ教育についてのEUからのインパクトですが、仰る通りです。ただ、公立学校の教育には以前から未来の市民にとっての主権者教育というような意味があったし、人種差別反対教育というものをやっています。シティズンシップ教育の実体については導入されて一年目なので、くわしい成果はまだわからないというべきでしょう。生徒たちにとっては一つ科目が増えたようなものだというくらいにしか受け取っていないように思えます。

第三の問題は親が子供を分離したスクールにやることを欲しているか否かという問題です。取り上げた調査のデータはすこし時代遅れになっているかもしれません。基本的には親が女子については分離したイスラム系の宗教学校に通学させたいと思っているということはいえると思います。しかし、例えば、ロンドンの場合などでは公立学校のなかに女子校がたくさんあるので、イスラム教の独立した女子校を求めるとは限らないのです。小学校の場合はほとんど気にしていない。問題となっているのは親と子供の間で要求が異なっているということです。とくにイスラム教の子供でポップミュージックを勉強したいという子供も出てきますが、親はそれを望まないというような事が起きています。

上田学：京都女子大学の上田です。イスラム教としては一体感がある、世界宗教だが、それぞれの文化的バックグラウンドだとか、地域性というものによって、かなり違うのではないかと。例えば、アジア系、マレーシアとかインドネシアのイスラムとパキスタンのイスラムと北アフリカのイスラムと、あるいはアフリカのイスラムとでは文化的な背景が違う。同じイスラムといっても、文化的背景の違いというものによって、男女共学、男女別学というものについての考えが違うのではないかと。あるいはまた西洋化されて度合の違い、例えば、クウェートのイスラムなど、こういうものによって同じイスラムといっても共通に扱っていいのかどうか、疑問に思うのですが、いかがでしょうか。

GW：ご指摘はまったく正しいと思います。そうした識別をするという必要があります。各学校個々が多様性をもっている。どのような出自の親であるのか、どこの地域に位置しているかということによっても多様性が生じる。同じイスラムといっても、どこの国、地域からきているかとうことで非常に多様性がある。

柴田政子：同志社大学非常勤講師の柴田です。生産的効率について質問をします。宗教立学校と宗教混合学校について、学問的効率ということですが、ウォルフォード先生のペーパーのなかでは、どちらかというところと財政面と効率ということを視点においているが、私は宗派別もしくは宗教混合の学校が生徒の精神的なコンディションという視点からみての効率ということから質問をしたいと思います。OECDのPISA(国際学力比較)の結果がドイツでは大きな話題となっています。ドイツの結果は過去に例がないほど惨澹たる結果であったというわけですが、ところがよくみると、宗派別、とくにカトリックですが、宗派別教育に固執した、いわゆる保守的な南部の州は悪かった中では比較的よかったということで、非常に伝統的価値観であるとか、子供の精神的安定ということで、やはり宗派別の学校の方が子供の学校でのパフォーマンスがよくなるというような関連づけがされている。こういうコンテキストでこの宗派別、宗派混合の学校についての生産的効率をめぐる議論があるのかどうか、質問します。

GW：ご質問はとても興味深いと思います。OECDのレポートは詳しく検討していませんが、イングランドでも宗教系学校の方が非宗教系学校よりも成績がよいという結果が出ています。これについては、私も、また多くの人も、ローマン・カトリック、英国教会の学校の成績がよいというのは、もともと選抜校であり、似たような子どもたちを集め、学校を強く支持する親を集めているからだとして解釈しています。カトリック教会系学校についての研究はジェラルドのものがありますが、イスラム学校などについての研究はありません。

広瀬裕子：専修大学の広瀬です。宗教系学校について、宗教、宗派による公立学校の数が違ってきているのは、各グループの行政に対して権利要求するスタンスが違うということによるのかもしれないという直観があるのですが、そういうことはどうでしょうか。

GW：キリスト教の原理主義者はウエストミンスター（国会）とつながって組織が強いということと国会議員のなかにもそうした運動体があるということで、そうした強さがある。それに比べて、イスラムにとってはまだ国会議員は一人しかいないということもあって、そういう意味での政治的な圧力というのは弱いのだが、公費援助の宗教系学校に対してはイスラム系の学校が出来ており、原理主義の方は作られていない訳なので、そういう意味ではイスラムのほうがラッキーだったといえるかもしれない。イスラム学校はもう少し増えるだろうと予測しています。ただ、イスラムの共同体と政府という考え方で行くと、例えば、ロンドンだと非常に大きな票田になっているので、その地域の国会議員はイスラムの人たちとフィードバックをしなければ当選しないことになるので、そういう意味ではかなり強いリンクはあるのではないかと考えています。キャンペーンはやっていない。

清田夏代：都立大大学院博士課程の清田です。ブレアはいわゆる多様性と選択など、多くのものをサッチャーから引き継いでいると言われている。しかし、LEAの扱いを検討した場合には保守党と労働党の間には大きな違いがあると思います。サッチャーの場合はLEAを排除することによって国家が直接学校を統制し、学校間に競争的な場を創り出すことによって市場原理による秩序化を図ったのではないかと考えています。これに対してブレアの場合はLEAに再び役割を与えることを強調しているが、それにより学校間の非競争的の調整を図っているように私は考えています。教育の公共性をサッチャーは市場に担わせようとしていたとみていますが、ブレアのそれは再びLEAを通じて国家に多様性と社会統合とを両立させる一つのモデルになっているのではないかと考えています。ウォルフォード先生はこの点について、どのようにお考えでしょうか。

GW:全体としてはあなたの意見に賛成することができます。たしかにサッチャーはマーケットでコントロールしようとしていました。ただ、継続性のほうが強いように思います。サッチャーは2年間は市場で統制できると思っていたようだが、2年たって、視学官制度の改組とか、だんだん中央集権的な枠組みを入れだしてきたので、そういう意味ではブレアともつながっているといえます。ブレアは今LEAを利用しようとし始めていて、それも生産的利用といっているが、ちよとずつ統制を足していますが、どちらかという調整機能という形でLEAを利用しています。そういう意味ではサッチャーはLEAを排除しようとしてきましたから、この点は違うと思います。ただ、どういっても、多様性といった点で見ればブレアはサッチャーの枠をひきついで、むしろそれを活発化させているようにみえます。

司会:残念ですが、時間がなくなってしまいました。続きは明日のシンポジウムでやりたいと思います。通訳の仕事をしてくださった本岡愛実さん、ご苦労様でした。最後にウォルフォード先生から、ご挨拶があります。

GW:セッションを終わる前に一言申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。うまく質問にお答えできたかどうか、不安ですが、いろいろなことを考えさせられた、とてもよい質問がたくさん出た、得がたい会だったと思います。今日はどうもありがとうございました。